Title	シンボリック相互作用論の根本問題 : ハーバート・ブルーマーを起点として
Author(s)	桑原, 司; 木原, 綾香
Citation	経済学論集=Journal of economics and sociology, Kagoshima University
Issue Date	2011-10-25
URL	http://hdl.handle.net/10232/12040
Rights	

シンボリック相互作用論の根本問題

── ハーバート・ブルーマーを起点として ──[1]

The Fundamental Problems of Symbolic Interactionism

桑原　司
Tsukasa Kuwabara

木原綾香
Ayaka Kihara

第１節　シンボリック相互作用論の現況とブルーマー再考

「シンボリック相互作用論」(Symbolic Interactionism) とは，1960年代初頭[2]にアメリカの社会学者ハーバート・ブルーマー (Blumer, H.G.) が唱導した，社会学的・社会心理学的パースペクティブの１つである。それは，人間間の「社会的相互作用」(social interaction)，就中，「シンボリックな相互作用」(symbolic interaction) を主たる研究対象とし，そうした現象を「行為者の観点」(standpoint of the actor) から明らかにしようとするものである (船津 1976)。

シンボリック相互作用論は通常，その歴史的由来をG.H.ミードの業績に遡ることが出来る，と言われている。ミードは生前数多くの論文を執筆したが，ミードのシンボリック相互作用論に対する影響の大部分は，彼の講義を聴講していた学生らによる講義録やメモの出版を通じて，あるいは当時ミードに学んだ学生の１人であったブルーマーによるミード解釈を通じて及ぼされた，と言われている。ブルーマーは，主として1950年代と1960年代に数多くの論文を執筆し，シンボリック相互作用論の体系化を図った。以上のことから，シンボリック相互作用論は，ミード (の思想) が知的源流であり，ブルーマーによって確立された，という見方が定着した (Charon 1979: 26)。

ブルーマー以降，数多くの研究者たちが，ミードを初めとする「初期相互作用論者」(early interactionists)[3]に依拠しつつ，シンボリック相互作用論の発展に寄与してきた。シャロンも述べるように，「過去四半世紀にわたって，感情の研究や質的調査方法論の求心力とE.ゴフマンの諸論考が主要因となって，シンボリック相互作用論はかつてないほどに重要なものとなり，数多くの社会

1　なお本論は，次の原稿に大幅な加筆補正を施したものである。桑原　司・木原綾香，2010年「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論の展開可能性」鹿児島大学大学院人文社会科学研究科（博士後期課程）地域政策科学専攻『地域政策科学研究』第７号，237-249頁（http://ci.nii.ac.jp/naid/120002080967)。

2　ここでは，「シンボリックな相互作用としての社会」(Blumer 1969: 78-89=1991: 101-115) が公刊された1962年を念頭に置いている。

3　ここで「初期相互作用論者」とは，J.デューイ，W.ジェームズ，C.S.パース，C.H.クーリー，W.I.トーマスらを指している（Charon 2004: 29)。

思想家たちや調査研究者たちを，新規で生産的な方向に導いていった」(Charon 2004: 30)。

一方，我が国のシンボリック相互作用論研究の動向に目を転じるとき，特に注目に値するのは，日本社会学史学会の『社会学史研究』第31号 (2009年) と，東北社会学研究会の『社会学研究』第82号 (2007年) の存在である。前者は「20世紀アメリカ社会学における『個人化する社会』」という特集のもと，「個人化論」という観点から，ミード，ゴフマン，J.アレクサンダーに焦点を当てているが，収録された論文はいずれも，1970年代から80年代にかけてアメリカ社会学界を主たる舞台として展開された【シンボリック相互作用論の刷新運動】を，「意図せざる結果」として内包したものとなっている。また後者の特集は，「シンボリック相互行為論［作用論］の刷新」を企図したものであり，「これは端的にいえば，経験的研究の分析視角・方法論としてその意義を再検討する試み」(山口 2008: 5) として位置づけられるものである。

本論は，シンボリック相互作用論のなかでも，その原型[4]としての位置づけをなお依然として持ち続ける，ハーバート・ブルーマーの理論化を検討しようとするものである。続く第２節では，その理論化について検討し，その後，そうしたブルーマーの理論化に対する諸批判の整理を試み (第３節)，最後に，そうした諸批判に応えるためにはどのような作業が必要かについて，我々の見解を提示することにしたい (第４節)。

第２節 「３つの基本的前提」「パースペクティブ」「メソッド」

ブルーマーによれば，シンボリック相互作用論とは，次の３つの基本的前提を共有する社会科学的パースペクティブのひとつを指す (Blumer 1969=1991)[5]。

１）人間は，ある事象に対して，その事象が自分にとって持つ意味に基づいて行為する。
２）そうした事象の意味は，人間がその相手（仲間）と執り行う社会的相互作用より，導出され発生する。
３）こうした事象の意味は，その人間が，自分が直面した事象に対処する際に用いる自己相互作用 (self-interaction) の過程を通じて，操作されたり修正されたりする。

ここで「自己相互作用」とは，「自分自身との相互作用」(interaction with oneself) とも言われ，それは，「個人が自分自身と相互作用を行っている過程」であり，「個人が自分自身に対して話しかけ，そしてそれに対して反応する，というコミュニケーションのひとつの形態」である。

この「自己相互作用」は，社会学及び心理学において重要な概念として位置づけられている「自

[4] 「シンボリック相互行為論［相互作用論］もいろいろな形をとっており，それゆえ簡略にまとめて述べるのは難しい。この学派に共有されている仮定の多くは，ハーバート=ブルーマー (1900-1987) の著作『シンボリック相互作用論：パースペクティヴと方法』(Blumer 1969) に由来する」(Schwandt 2007=2009: 119-120)。

[5] なお本節の第３項までの内容は，先に筆者の１人 (桑原) が公刊したもの (桑原 2002) に加筆補正を施したものである。

我」(self) ないしは「自己」の内実に相当するもの，とブルーマーにおいては考えられている。

2-1 「意味」（第１の前提）

第１の前提の要点は，人間がある「事象」(thing) に対して行う行為のやり方ないしその様式は，その事象がその人にとって持つ「意味」(meaning) によって定められている，ということである。

ここで「事象」には，人間が自らの日常世界において気にとめるであろう，あらゆるものが含まれている。木や椅子といった物的なもの，母親や店員といった他者たち，友人や敵といった人間に関する各種のカテゴリー，学校や政府といった諸々の機関，個人の独立とか誠実さといった指導的理念，命令・要求といった他者たちの活動，そのほか日常生活において個人が直面するであろう種々の事柄が含まれている。こうした「事象」が，それに対処する個人に捉えられる(見られる)，その「捉えられ方(見られ方)」，それが「意味」である。

人間がある「事象」に対して行う行為のやり方（ないしその様式）は，その事象がその人にとって持つ「意味」によって定められる。こうした意味での【「事象」と「意味」のセット】が，シンボリック相互作用論における「対象」(object) を構成することとなる。そうした対象がある人間にとって持つ「特性」(nature) とは，その対象がその人間にとって持つその「意味」によって定められる。

対象の特性 (nature of an object)は，それを自らにとっての対象としている人間に対して，その対象が持っている意味から構成されている。意味によって，人が対象を見るやり方，それに対して行為しようとするやり方，それについて話すやり方が定められる[6]。この「対象」は大別して３つに分けられる。すなわち，(a)物的対象，(b)社会的対象，(c)抽象的対象がそれである。

人間を取り巻く「環境」とは，こうした「対象」からのみ構成されており，それ故に，対象の特性(意味)の如何によって，その環境が人間にとって持つ特性が定められることとなる。

人間にとっての「世界」(world) とは，この意味での「環境」からのみ構成されている。

2-2 意味の社会性（第２の前提）

ブルーマーは，「意味の源泉」に関するふたつの伝統的な立場を次のように説明している。

まず第１の立場においては，事象の意味とは，その事象に内在的に備わっているもの，ないしは「その事象の客観的な構成として，その事象に生来的に備わっている一部分」と捉えられている。したがって，この立場においては，「椅子はそれ自体明らかに椅子であり，牛は牛，雲は雲，反乱は反乱などなど」，それを取り扱う人間の如何に関わらず，その意味は，その事象にあらかじめ備わっているものと捉えられることとなる。こうした立場に立つものが，哲学における伝統的な「実在論」(realism) である。

[6] 人間は，事象それ自体の如何に基づいてその事象に対して行為するわけではない。あくまでも，その事象が自分にとってどのような意味を持っているのか，換言すれば，その事象に対してその人がどのような【イメージ】を持っているのか，その如何に基づいて行為（ないしは働きかけ）を行うのである。この点については，中島（2002）; 井原（2002: 155）が示唆に富む。

次に第２の立場においては，事象の意味とは，「その事象がその人にとってその意味を持つことになる［ある特定の］人間によって，その事象に対して心的な付加物として与えられたもの」と捉えられている。ここで「心的な付加物」（psychical accretion）とは，その人間の心や精神，ないしは心理的な組成を構成する諸要素が，外部へと表出されたものと捉えられている。ここで諸要素には，感覚（sensation），感情（feeling），観念（idea），記憶（memory），動機（motive），態度（attitude）などが含まれている。この立場に立つものとしてブルーマーは，「古典的心理学」（classical psychology）と「現代の心理学」（contemporary psychology）を挙げている。

第３の立場としてブルーマーが挙げるのが，シンボリック相互作用論の立場に他ならない。ブルーマーによれば，事象の意味とは，その事象に生来的に内在するものでも，人間個人によって主観的ないしは心的に付加されるものでもない。それは，まず何よりも，人々の間の社会的相互作用[7]の過程から生じるものである。ブルーマーによると，シンボリック相互作用論においては，意味とは，人々の間の相互作用の過程から生じるものと考えられている。すなわち，ある人間にとってのある事象の意味とは，他の人々がその事象との関連においてその人に働きかける，そのやり方から生じてくるものと考えられている。他者の行為がその人にとっての事象を定義するように作用するのである。

この例として「野球のバット」を挙げてみよう。それが，アメリカのティーンエージャーにとって意味しているものと，野球の試合というものを一度も見たことがないアフリカのピグミー族の人にとって意味するものとは当然異なる。また，歌に必要な楽器「モリモ」が，ピグミー族の人々にとって持つ意味と，アメリカ人にとって持つ意味も当然異なり得る。自分が属する文化圏に含まれる他の人々との社会的相互作用を通じて，人は誰でも，さまざまな道具を，例えばスポーツのため，あるいは宗教的祭儀のためというように，様々な使い方を通じて楽しむことを学ぶ。野球のバットがピグミー族の人々にとって「謎めいたもの」に見えるように，モリモもまた，モリモが中心的な役割を持つ聖なる祭りを経験したことのないアメリカ人にとっては，「謎めいたもの」に見えるに違いない。バットもモリモも重要な文化的道具であり，両者の意味は社会に暮らす他の人間との相互作用から生まれてくるものである。

ある人間にとっての事象の意味とは，その事象との関連において，その人間と社会的相互作用を行っている他者（たち）が，その人間に対して行為する，その行為のやり方ないしは様式から生じるものと捉えられる。このテーゼは，先に挙げた３種類の「対象」のそれぞれに当てはまる[8]。アメリカ人にとって「バット」という対象（ここでは「物的対象」）が，まさしく「野球のボールを

---

[7] ここで社会的相互作用には，現代的な事情を考慮するならば，対面的相互作用からインターネット空間のコミュニケーションまで，様々な形態の相互作用が含められるべきである，と我々は考えている。木村（2009: 3-6，161-164）を参照。

[8] なお，「社会的対象」と「抽象的対象」については次を参照されたい。ウィキペディアの執筆者，2011年「シンボリック相互作用論」『ウィキペディア日本語版』（2011年９月12日取得，http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%9C%E3%83%AA%E3%83%83%E3%82%AF%E7%9B%B8%E4%BA%92%E4%BD%9C%E7%94%A8%E8%AB%96&oldid=39112845）。

打つための道具」としての意味を持つのは，そうしたアメリカ人の日々の暮らしの中で，その人と相互作用を行っている他者たちが，その人の面前で（その人に対して）そうした道具として，そのバットを扱ってきたからであり，そのバットという対象に，あらかじめそうした意味が内在化されているわけではない。ピグミー族の人々にとっては，それは「謎めいたもの」としての意味しか持ち得ないことからも，そのことは明らかであろう。ブルーマーにおいては，事象の意味とは，こうした意味で「社会的所産」(social product）なのである。

2-3　意味の解釈（第３の前提）

対象（となる事象の意味）は，社会的相互作用の文脈において形成され，人々によってそこから引き出されるものである。また人間は，そうして形成された意味に基づいて，その対象（となる事象）に対して行為を行う。換言するならば，そうして形成された対象の意味が，その人間のその対象に対する行為の様式を定めることとなる。

ブルーマーが，シンボリック相互作用論の３つの前提のなかでも，とりわけ重視し強調するのが，以下に説明する「第３の前提」である。すなわち，他者によってもたらされた，その人間にとっての事象の意味は，その人間によってそのまま自動的に適用されるものではなく，それは必ず[9]，その人間の「自己相互作用」(self-interaction）を通じて，操作されたり修正されたりするものと捉えられなければならない。

「自己相互作用」とは，先にも述べたように，「自分自身との相互作用」を意味する。それは言うなれば，他者（たち）との社会的相互作用が個人の内に内在化された，「自分自身との社会的相互作用」に他ならない。ブルーマーによると，この過程にはふたつの別個の段階がある。まず第１に，行為者は，自らがそれに対して行為している事象を，自分自身に「表示」(indication）しなければならない。すなわち，行為者は意味を持つ事象を自分自身に「指し示す」(point out）という営みをまず行わなければならない。第２に，その後に行為者は，「解釈」の問題に直面する。「解釈」(interpretation）とは「意味の操作」(handling of meanings）を意味する。行為者は，自分がおかれている状況や自分の行為の方向に照らして，その意味を選択したり，検討したり，保留ないしは未決定にしたり，再分類したり，変容させたりする。すなわち，自己相互作用には，「表示」と「解釈」というふたつの段階がある。前者の段階において，行為者は，先行する社会的相互作用の過程を通じて形成された「対象」を自分自身に指し示し，後者の段階において，その「対象」(となる事象の意味)を，自らがおかれている状況とそれに対する自らの行為の如何という観点から再検討

[9] この「必ず」という点については，大いに議論の余地があろう。我々の考えでは，ブルーマーが1931年に発表した「概念なき科学」(Blumer 1969: 153-170=1991: 200-223）における「知覚」(perception)と「認識」(cognition）に関する説明が，この論点の検討に大きな示唆をもたらしてくれる。

することになる[10]。こうした過程を経て（一時的に）確定されたその行為者にとっての「対象」が，その行為者にとっての「自らの行為を方向付け形成するための道具（instrument）」として，その行為者のその後の行為を導いて行くこととなる。

2-4 パースペクティブとメソッド

以上，本節前項までに説明した３つの基本的前提をもとに，ブルーマーは，その著『シンボリック相互作用論』（Blumer 1969=1991）およびその後の論稿において，シンボリック相互作用論の「パースペクティブ（perspective）とメソッド（method）」の構築を終生試み続けた。ブルーマーのパースペクティブおよびメソッドについては，先に筆者の一人（桑原）が詳細な検討を加えておいた（桑原・油田 2011)。その内容を要約的に提示するならば，以下の５点にまとめることができる(桑原・油田 2011: 1-11)。

１）個人は，「他者たちの集団」(groups of others)との社会的相互作用を通じて，「定義の諸図式」(schemes of definition）と「一般化された諸々の役割」(generalized roles）というふたつの「パースペクティブ」(perspective）を獲得する。このふたつのパースペクティブが，その個人の解釈なり定義なりを方向付けることになる。これがブルーマーのシンボリック相互作用論における「社会化」(socialization）を意味する。

２）上記のふたつのパースペクティブに方向付けられた解釈・定義という営みが，社会の形成・存立を可能にする。ブルーマーにおいて社会とは，その形成・存立に参与（寄与）している個々人が，「自己相互作用」(「考慮の考慮」(taking into account of taking into account)）と呼ばれる解釈的営みを通じて，各々ふたつの観点（「相手の観点」，「相手のパースペクティブから見た自分自身の観点」）の双方を適切に把握（定義）している時にのみ成立するものと捉えられている。

３）とはいえ，相互作用においては，そこに参与している個々人は，互いに相手が「ブラック・ボックス」の関係にあるため，各々がその時々に把握したふたつの「観点」は，常に【仮説】として，すなわち，その修正・変更を余儀なくされる可能性がいつでも存在しているものと理解されなければならない。こうした理由から，人間の社会は，たとえそれが構造化された様相を呈しているものであったとしても，本質的に「動的なもの」として，すなわち，絶えず変容への可能性を有し続けているものとして把握されなければならない。

---

[10] ここでいう「解釈」なり「自己相互作用」なりは，個人が「我思うゆえに」的な形で自由に(フリーハンドに)行えるものと考えられてはならない。あくまでそれは，いつでも【他者の目】を内包する形で行われているものと考えられなければならない。ブルーマーは次のように述べている。「他者が目の前にいて，行為を展開している，ということが，自らの行為を方向付ける根拠となる。またそのことは，自分にその行為の指針を与えているその個人に，その場その場で，自らをチェックさせ，ある特定の感情の表出を抑制させ，また一定の願望は一時的に抑えておかなくてはならないと思わせるような，そうした意識経験を与える」(Blumer 1969: 111=1991: 145)。上記の注9と同様，ブルーマーのシンボリック相互作用論の理論枠組を再考する上で重要な論点となる。

４）社会を研究する者は，それを構成する「行為者の観点」からアプローチしなければならないが，そこで言う「行為者」とは，あくまで「行為者個人」を指す。ブルーマーは「行為者」に言及する際に「活動単位」(acting unit)という用語を用い，その活動単位には個人のみならずあらゆる規模の集団が含まれる，としているが，経験的な研究を遂行する上では，活動単位に「あらゆる規模の集団」を含めるわけにはいかない。

５）研究者によって把握された「行為者の観点」とは，あくまで「対象者の解釈過程に対する研究者の解釈過程」であり，行為者の観点それ自体（そのありのままの姿）ではあり得ない。

以上本節では，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「前提」「パースペクティブ」「メソッド」の３つを足早に検討してきた[11]。本節の素描内容を踏まえた上で，次節以降では，上記に記述したブルーマーのシンボリック相互作用論の「前提」・「パースペクティブ」・「メソッド」(＝ブルーマーのシンボリック相互作用論の「方法論的スタンス」）に対して寄せられてきた諸批判の整理・検討を行うことにしたい。

第３節　２つの批判

かねてより，ブルーマー(等)のシンボリック相互作用論に対しては，様々な批判が寄せられてきた。シンボリック相互作用論が提示している概念は何れも曖昧なものばかりであり，その内容が前後で首尾一貫していないこともある，とりわけそのキー概念である「解釈過程」(＝自己相互作用)の内実が十分に解明されていない，解釈過程の「社会による形成と規定の側面」をほとんど閑却してしまっている，シンボリック相互作用論は意識的・知性的なものだけを取り扱い，無意識や感情が人間の社会的相互作用において果たす役割を軽視している，「全体社会の構造的現実を明らかにする努力は何もなされておらず，社会構造についての理論的枠組は存していない」，「ミクロ状況における構造的要因の重要性」に対する視点が欠如している，その方法論の「補充と洗練化」がなされていない，「感受概念［法]」の内実が「あいまい」である，経験的な研究過程において「現実を集約し，整理していく」手続きが不明瞭である，彼(等)が推奨する「質的分析」を「職人仕事」的なものから脱却させなければならないという課題がある，などなど（船津 1976: 41-44; 1989: 215)。そうした種々の批判のなかでも常套句的なものとしてこれまで挙げられてきたのが，「主観主義」批判と「ミクロ主義」批判の「２つの批判」に他ならない (桑原 1997)。

J.D.ルイスによれば，ブルーマー等のシンボリック相互作用論は，「社会のなかでその役割を遂行することはあっても，決して社会の所産（product）にはならない」という人間観（「ジャングル

[11] なお，本節「2-4」の典拠となっている桑原・油田 (2011) の内容は，これまでたびたびリプリントを重ねてきたものである（桑原・油田 2011: 12[注11]）(http://megalodon.jp/2011-0912-1328-48/liveweb.archive.org/http://sites.google.com/site/articlesoftsukasak/15)。そのため，本論では，特にこの「2-4」に関しては，その内容の叙述を必要最低限にとどめた。

に棲む社会化されざる利己的人間」(an unsocialized calculating man of jungle)) をその根底に持つものである。より詳しく述べるならば，ブルーマーにおいて，人間とは，自由に (フリーハンドな形で) 解釈を行い，そうした解釈に基づいて行為を構築し，そうした行為が人間の社会を形成するものと捉えられている。ところがその一方で，既存の社会 (社会構造) から，そうした人間の解釈的営みへと及ぼされるであろう諸影響については，全くといって良いほどその理論化の対象となっていない。このようにルイスは述べている[12]。

上記の主観主義批判をさらに深く展開したものとして位置づけられるのが，徳川 (2002) による疑問と回答である。徳川は以下の様に述べている。

「ブルーマーの前提に沿って考えてみよう。ある山が，ある集団にとっては人間がふみいってはならない聖地であり，他の集団にとっては採掘すべき鉱物のありかであると仮定する。また仮に，グローバリゼーションという言葉が，ある集団にとっては互恵的な分業の広がりによって世界が緊密に結びついてゆくことを意味するが，他の集団にとっては特定の力の支配力が世界大のものになった結果として地場産業や自文化を破壊されることを意味する [もの] としてみる。第１前提のいう通り，それぞれの集団のメンバーはこれらの意味に基づいて行為するであろう。また第２前提の言う通り，その人びとはこうした意味世界の住人であるがゆえにそのような意味を当然視しているのであろう。しかしそうだとすれば，第３前提が言うようにこれらの意味が解釈しなおされることは，そう容易には起こらないことにならないか。その山を聖地と見なすことは当該集団の文化や伝統の中核であろうし，反グローバリゼーションを主張する者は何らかの利害的立場を持つ集団の中で自我形成したと考えられるからである。それが自由に解釈できるのであれば，今度は第２前提が成り立たなくなり，意味は社会との接点を失って，社会学的な説明ができなくなるだろう」(徳川 2002: 86-87)。

徳川は，先に本論の前節において展開した「３つの基本的前提」について上記のような疑問を提示し，その前提の捉え返し (疑問に対する回答) を試みている。

またN.スメルサーは，ブルーマーのシンボリック相互作用論のミクロ主義的な性格を指して次のように論難している (Smelser 1988: 122)。

「社会学的な分析の中心には，社会構造についての考察をおくべきであり……ブルーマーは，この立場 [＝社会構造を取り扱うという社会学者の立場] から，社会学者として可能な限りもっとも離れたところに位置した。我々がウェーバーにおいて見出したような，主観的立場 (the subjective) から構造的立場 (the structure) へと移行する努力は [ブルーマーには] 全く見受けられない。……如何なる [社会] 現象も [それを担う] 個々人の意味の体系という文脈において把握されるべきで

[12] 桑原　司，2000年「社会過程の社会学」(2011年９月12日取得，http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor1.htm) において，その詳細が展開されている。

あるという［社会学者一般とは］異なった研究手法を取ろうとするがために，シンボリック相互作用論が有するパースペクティブは，［主観的立場から構造的立場へと移行する］すべての可能性を(そして，［シンボリック相互作用論が］科学というステータスを得る可能性のすべてを)否定してしまった」。

J.H.ターナーも，ブルーマーのミクロ主義的な性格を論難している。ターナーは，ブルーマーが「ミクロな相互作用過程を強調する方法論を採用してきた」と述べ，その分析枠組（パースペクティブ）のみならず，方法論（メソッド）に対しても「ミクロ主義」というレッテルを貼ろうとしている[13]。

ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられた以上の４つの批判は次のようにまとめることができよう。

１)「社会構造⇒解釈」的視点の欠如（ルイス，徳川)

２)「解釈⇒社会構造」的視点の欠如（スメルサー)

３)「社会構造それ自体」に対する視点の欠如（スメルサー)

４)「社会構造」の経験的解明手法の未確立（ターナー)[14]

以下，本論最終節では，上記の４つの批判に対して，ブルーマーのシンボリック相互作用論から，いかなる「反論」ないしは「反論的展開」が可能となるのか，その可能性と方途について考察したい。

第４節　シンボリック相互作用論の根本問題 ――ハーバート・ブルーマーを起点として――

以下，前節で提示された４つの批判に対する我々のスタンスを提示することにしたい。ここで「スタンス」とは，言うまでもなく，ブルーマーのシンボリック相互作用論の「反論的展開」に対する我々の見方を指す。

１）に対して：まずルイスの批判に関しては，既に筆者の１人（桑原）が「インテンシヴな検討」(木原・桑原 2011: 5）を試みている。したがって，ここで問題となるのは，徳川が指摘する【第３前提の成立可能性】に関する問いである。先に前節で紹介した徳川の疑問に対する彼自身の回答として，徳川は「再読すべきはブルーマーの第３前提ではなく実は第２前提［である]」とする視点を提案する（徳川 2002: 89)。行為者による意味付与（=解釈活動の結果）は恣意的に行われうるものではない。それは複数の人びとの間の社会的相互作用を通じて行われるものである（第２前提)。ではこの命題は第３前提とどのように接合されうるのであろうか。徳川は次のように述べる。

---

[13] 桑原　司，2000年「社会過程の社会学」(2011年９月12日取得，http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1195815/ecowww.leh.kagoshima-u.ac.jp/staff/kuwabara/doctor4.htm）において，その詳細が展開されている。

[14] なお，ここに挙げた４つの批判のうち，１）～３）の内容については，既に片桐（1998: 72-73）がJ.F.アレクサンダーの説をもとに指摘している。

「行為者がいかにして特定の意味付与をするに至ったのか。それは分からない。ここにいう行為者とは（したがって解釈なり意味付与の主体は），個人としての個人である場合もあれば，学校長のように組織の代表である場合も，社会運動体のような集合体である場合もある。これらの行為者が満場一致の意味付与を表明するとは考えにくい。となると，誰のどのような意味付与も，他者による異なる意味付与との関係のなかでなされざるをえないことになろう」(徳川 2002: 89)。すなわち，人々の社会的相互作用とは，「異なる意味付与の競合」(徳川 2002: 89)という形で行われるものと捉えられるべきである。「意味付与はそれ自体せめぎ合いであり，ポリティクスなのだ。こう読み直せば，そのとき意味は，異なる文脈の交差のなかで評価や批判にさらされることになるだろう。つまり，第３前提の『解釈』にもつながっていくわけである」(徳川 2002: 89-90)。しかしながら，このように人々の社会的相互作用を「異なる意味付与の競合」と捉える視点は，ブルーマーには明示されていない，と徳川は述べる（徳川 2002: 90)。そこで彼は，ブルーマーの第２前提のさらなる展開を図る方途として，ビリッグ（Billig, M.）の「レトリカル・アプローチ」を選択した(徳川 2002: 90-101)。とはいえ私見では，わざわざビリッグのような「別の系譜」(徳川 2002: 90)に属する学説を持ち出す必要はない。ブルーマーが1971年に発表した「集合行動としての社会問題」(Blumer 1971=2006）こそ，ここで問題となっているブルーマーの「第２前提」(と「第３前提」との関わり) を理論化・展開する上で格好の素材であることを先に我々は指摘しておいた（桑原・山口 2006: 52)。ブルーマーのこの1971年の論文は，その後「社会問題の（社会的）構築主義」の知的源泉となったこともあり，内容的にのみならず，学説的系譜上も，非常に都合の良い（正統な）位置づけを有している[15]。

２）に対して：この課題については，D.R.メインズとT.J.マリオーネが，ブルーマーの遺稿をもとにした *Industrialization as an Agent of Social Change* の編集を通じて回答を試みている (Blumer 1990=1995)。メインズとマリオーネは，まさに前節で挙げたスメルサーの批判を明示的に念頭に置いた上で，この文献の編集と解読を試みている。訳者の片桐雅隆によれば「この本は，……従来『ミクロ社会学』と位置づけられてきたシンボリック相互作用論が産業化という『マクロ現象』を扱ったものとしても注目される書である」(Blumer 1990=1995: 239)。

３）に対して：これはまさしく「ミクローマクロ問題」が提起した問題のひとつである。この批判に十全に応えることは，そのまま「２)」の批判に対する回答をさらに高度に提示することにもつながる。この批判に応えるに際しては，内田（1996）やメインズら（Maines and Morrione 1990: xv=1995: 12）も強調するように，ブルーマーの「ジョイント・アクション」(joint action) 論を展開する作業が必要となる。内田も述べるように，ジョイント・アクション論には明確に構造論的視野が提示されている。このジョイント・アクション論を精緻化することで，ブルーマーに対して寄

---

15 西澤・ほか (2008: 35, 61) を参照のこと。なお，以上の考察を踏まえるならば，この徳川の批判は，より正確には，「1)」に位置づけられるもの，というよりも，「1)」と「2)」の狭間に位置づけられるもの，と捉えることができよう。なお，本号（『経済学論集』第77号）に所収の「社会問題研究とリアリティ」(木原・桑原) 論文は，まさにこの問題を解明しようとしたものである。

せられてきた「非構造論的偏向」なる批判に対してひとつのリプライを返すことが可能であるが[16]，先に別稿において我々が明示したように，ブルーマーの社会観が初期シカゴ学派社会学より継承した[17]「均衡論的変動論」(吉原・桑原 2004: 105, 117) に立脚している以上，ブルーマーにおける「構造」とは「過程のただ中にある構造」(内田 1996: 108-109) として概念化されなければならない点をここで強調しておきたい。

４）に対して：この問題に対してかつて船津　衛は次のように述べていた。すなわち，「……シンボリック相互作用論はミクロ社会学の性格を帯びたものであり，したがって，小状況の研究に徹する方がその特質を生かすことになる，という見解が……有力化しつつある。この見解はシンボリック相互作用論内部においても強まってきている……」(船津 1989: 233)，と。そしてこの問題こそ，目下，ブルーマーのシンボリック相互作用論が抱えている最大の問題でもある。ブルーマーのシンボリック相互作用論は，その研究方法の鉄則として「行為者の観点」(standpoint of the actor) からのアプローチを推奨している。このアプローチは，先に本論第２節第４項でも触れたように，研究者が１つの社会を研究する際には，その社会を構成しているあらゆる人々の「観点」(standpoint/perspective) を取得し，そこで得られたデータから社会の構成を跡づけなければならない，とするものである (中野・宝月 2003: 288-290)。もしこの「鉄則」を堅持した上で，研究対象とする社会の規模を「マクロ化」して行くならば，研究者の技量にもよるが，ミクロ・レベル (２者・３者) からメゾ・レベルへ，そしてマクロ・レベル (N者) へと至るいずれかの地点で，「集団全体の役割を取得すること」という営みが不可能なものとなってしまう (植村 1989: 99-100)。この問題については，先に挙げた内田 (1996) にも，またメインズらの試みにも，その回答はおろか「てがかり」すら提示されていない。

むすびにかえて――さらなる加工を要する「原石」としてのブルーマー――

以上，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して寄せられてきた諸批判のうち，重要と思われる２つの批判 (主観主義批判，ミクロ主義批判) に焦点を当て，その内実を４つのサブ・カテゴリーに分類し，それぞれに対するブルーマーの理論化を【起点】とした「反論的展開」の可能性について考察してきた。

かつて，シンボリック相互作用論，とりわけブルーマーが論敵としたT.パーソンズは，その処女作『社会的行為の構造』の冒頭において，「いったい今誰が［ハーバート・］スペンサーを読むというのか」というC.ブリントンの言葉を掲げ，スペンサーが「死んだ」という「判断」(verdict)

[16] なお，内田も強調するように，ジョイント・アクション論には，「垂直の関係」と「水平の関係」が提示されている。前者の考え方を継承するものとして，A.L.ストラウス等の「覚識文脈」論と「交渉的秩序」論が挙げられる。また後者の考え方を継承するものとして「社会的世界」論が挙げられる。

[17] ブルーマーのシンボリック相互作用論と初期シカゴ学派社会学との連続性については，中野・宝月 (2003: 281-290) を参照されたい。

を肯定しつつも,「誰がどのように殺したのか。それが問題である」と述べた（Parsons [1937]1949: 3=1976: 17)。またそのパーソンズ自身も，1960年代から70年代にかけて，その十分な検討が行われることなく【殺され】かけたことは周知の事実である（佐藤 1997: 32)。しかし今，かつてパーソンズ（構造－機能主義社会学）を葬り去ろうとした主たる論客であるハーバート・ブルーマー自身もまた，同じ道を歩みつつあるのではないだろうか。否，おおかたの論客達は,【(ブルーマー理論は）とうの昔に「死んだ」のではないか】，と「判断」している傾向が強いとさえ思われる。

現在,「シンボリック相互作用論」を論じるにあたって，その提唱者（唱導者）としてブルーマーの名前が，またその「原型」として彼の「パースペクティブとメソッド」が「引用」「言及」されることはあっても，主たる研究対象としてそのテキストが具に「検討」されることは，少なくとも我が国のシンボリック相互作用論研究においては限りなくない，といっても過言ではないだろうか[18]。

かつてブルーマーの高弟T.シブタニは，ブルーマーの業績を正当に評価するためには，21世紀の到来を待たねばならない，と述べた（Shibutani [1988]1992: 256)。

今，2001年より11年の歳月が経とうとしているが，少なくとも今世紀に入って以降の我が国の研究動向を看取する限り，一部の「例外」を除いて[19]，ブルーマーのシンボリック相互作用論に対して「正当に評価」が行われた，とは少なくとも我々には思われない。

引用・言及文献

Blumer, H.G., 1969, *Symbolic Interactionism,* Prentice-Hall=1991年，後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房.

――――, 1971, Social Problems as Collective Behavior, *Social Problems,* vol.18=2006年，桑原　司（解説)・山口健一（訳)「集合行動としての社会問題」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第66号 (http://ci.nii.ac.jp/naid/120001394128).

――――, 1990, Maines, D.R., and T.J.Morrione (ed.), *Industrialization as an Agent of Social Change,* Aldine=1995年，片桐雅隆・ほか訳『産業化論再考』勁草書房.

Charon, J.M., 1979, *Symbolic Interactionism, 3rd edition,* Prentice-Hall.

――――, 2004, *Symbolic Interactionism, 10th edition,* Prentice-Hall.

船津　衛，1976年『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。

――――，1989年『ミード自我論の研究』恒星社厚生閣。

井原慶一郎，2002年「モダンとポストモダンについてのノート」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第58号。

[18] 今世紀前後の，我が国のシンボリック相互作用論研究において,「検討」の名に値する作業を行ったと目される数少ない論稿として，内田（1992; 1994; 1996; 2003; 2004; 2007）が挙げられる。

[19] 注18を参照のこと。

片桐雅隆，1998年「シンボリック相互行為論をめぐる２つの争点」日本社会学史学会『社会学史研究』第20号。

木原綾香・桑原　司，2011年「ブルーマーのシンボリック相互作用論における『３つの前提』の再解釈に向けて」The Economic Society of Kagoshima University『Discussion Papers In Economics and Sociology』No.1101（http://hdl.handle.net/10232/10097）。

木村雅史，2009年「E.ゴフマンの『フレーム分析』による多層的現実論の展開」2008年度・東北大学大学院文学研究科・博士学位論文。

桑原　司，1997=2009年「ハーバート・ブルーマーのシンボリック相互作用論における社会観再考［Web版］」『鹿児島大学リポジトリ』（http://hdl.handle.net/10232/6937）。

――――，2002年「自我の社会性」船津　衛・安藤清志編『自我・自己の社会心理学』北樹出版。

――――・油田真希，2011年「シンボリック相互作用論序説」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第76号（http://ci.nii.ac.jp/naid/120003055868）。

中島大輔，2002年「市壁の文化史――試論――」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第57号。

中野正大・宝月　誠編，2003年『シカゴ学派の社会学』世界思想社。

西澤晃彦・ほか，2008年『社会学をつかむ』有斐閣。

Parsons, T., [1937] 1949, *The Structure of Social Action*, The Free Press=1976年，稲上　毅・厚東洋輔訳『社会的行為の構造／総論（第１分冊）』木鐸社。

佐藤　勉編，1997年『コミュニケーションと社会システム』恒星社厚生閣。

Shibutani, T., [1988]1992, Herbert Blumer's Contribution to Twentieth-Century Sociology, Reprinted in, Hamilton, P.(ed.), *George Herbert Mead: Critical Assessments, Vol.2,* Routledge.

Smelser, N.(ed.), 1988, *Handbook of Sociology*, Sage.

Schwandt, T.A., 2007, *The Sage Dictionary of Qualitative Inquiry, 3rd edition,* Sage=2009年，伊藤勇・徳川直人・内田　健監訳『質的研究用語事典』北大路書房.

徳川直人，2002年「相互行為とイデオロギー」伊藤　勇・徳川直人編『相互行為の社会心理学』北樹出版。

内田　健，1992年「H・ブルーマーのルート・イメージ」早稲田大学大学院文学研究科『文学研究科紀要：別冊（哲学・史学編）』第19集。

――――，1994年「シンボリック相互行為論のコンテクスチュアルな読解に向けて」早稲田大学人間科学部『人間科学研究』第７巻第１号。

――――，1996年「ミクロ―マクロ問題――相互行為論からのアプローチ――」早稲田大学人間科学部『人間科学研究』第９巻第１号。

――――，2003年「H.ブルーマーにおける『概念』の問題」日本社会学史学会『社会学史研究』第25号。

――――，2004年「知の『広さ』／知の『深さ』」新潟大学大学院現代社会文化研究科「現代の社会と文化の変容に関する超越的研究」プロジェクト『社会と文化』第２号。

――――，2007年「私たちはSIで何ができるか――言葉の歩みをふりかえりながら」東北社会学研究会『社会学研究』第82号。

植村貴裕，1989年「大衆の社会学」片桐雅隆編『意味と日常世界』世界思想社。

山口健一，2008年「『文化』表象と『混交』のコミュニケーション論」2007年度・東北大学大学院情報科学研究科・博士学位論文（http://hdl.handle.net/10097/34641）。

吉原直樹・桑原　司，2004年「都市社会学の原型」宝月　誠・吉原直樹編『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣。